

Title	チャーチスト運動の特質とその歴史的意義について
Sub Title	The chartist movement and its historical significance
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1956
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.1 (1956. 1) ,p.37(37)- 51(51)
JaLC DOI	10.14991/001.19560101-0037
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19560101-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

織」及び「遠織速報」定期刊行・織維振興協會「遠州織維」月刊。
 泉南・松本薫「綿織物業の生産組織等に關する調査」(前掲書九
 一―二二頁)・佐藤明・前川嘉一著「中小工業の實態」昭和二十四年刊。
 播州 栗田眞造「機業經營の存立」(平井泰太郎編著「日本綿業
 の課題」昭和三〇年刊二五―三一―三四頁)・堂面秋芳、田中豐子
 「播州機業における勞働事情」(兵庫縣立勞働研究所「勞働事情調
 査報告第二集」昭和二八年刊)・楫西光速著「綿織物業の生産と流
 通」昭和二七年刊一四六―一五六頁)・兵庫縣産業研究所「播州
 織物振興對策」永田清編前掲書一五〇―一五八頁。
 遠州及び播州 山田文雄著「中小工業經濟論」昭和一八年刊一
 一三―一二八頁・瀧谷善一、藤井茂「綿織物業の輸出伸張力」
 (時局と中小工業)瀧谷善二編「我國織維工業の輸出伸張力」昭
 和一六年刊六一―一三七頁)
 知多 藤田敬三「知多綿織物業に於ける下請制」(藤田敬三編「下
 請制工業」昭和一八年刊一七五―二〇八頁)・松本薫「綿織物業の
 生産組織等に關する調査」(前掲書八〇―九九頁)・楫西光速著前
 掲書一五六―一六〇頁。
 三河 松本薫「綿織物業の生産組織等に關する調査」(前掲書一
 七一―一八五頁)・楫西光速著「日本近代綿業の成立」昭和二五年刊
 二〇―二四〇頁・同著「綿織物業の生産と流通」一六〇―一六三頁。
 久留米 田中定「久留米緋業論」(藤田敬三編前掲書二五―二
 七四頁)・吉岡直富「久留緋の生産狀況及び製造鑑定制度」(農商
 務省工務局編前掲書一八六―二二二頁)・田中定「久留米緋業に
 於ける失業と轉業」(山中篤太郎編前掲書一六四―一六九頁)

備後耕 山城雄吉「備後ガスリ」(經濟評論昭和二九年六月號一
 二五―一三八頁)
 青梅 大東亞織維研究會編「日本染織工業發達史」昭和一八年
 二一三―二二七頁
 伊豫耕 川崎三郎「伊豫耕の研究」(賀川英夫編「日本特殊産業
 の展相」昭和一八年刊三一―八二頁)
 泉州 大阪市立大學經濟研究所「泉州の綿織物業」昭和二六年
 刊・同「大阪における鐵鋼業綿織物業工業の實態」昭和二八年刊二
 七七―四五六頁・内田穰吉「泉州機業地」(經濟評論昭和二八年三
 月號一〇―一〇九頁)
 大阪綿業商社 大阪府商工經濟委員會「大阪を中心とする織維
 商業の調査」昭和二七年刊・大阪府立商工經濟研究所「織維商社
 の分析」昭和三〇年刊。
 紙數の制約からして、本文において典據を註記することは不本意
 ながら斷念せざるをえなかつた。
 これらの他に、遠州・播州については現地での見聞の若干を素材
 とした。この點現地の人々の好意に負う。
 資料入手については、大阪市立大學經濟研究所・大阪府立商工經
 濟研究所・兵庫縣産業研究所等より便宜を供與された。なお、伊東
 倅吉教授より有益な示唆を戴いた。
 追記 この小論は、筆者が日本都市學會による濱松市綜合調査の
 一部を分擔し、同市織物業の本格的調査を實施するのに先立つて、
 その準備として書かれたものである。従つて提起されたものは斷
 定的より、むしろ假設的意味をもつ。

チャーチスト運動の特質と

その歴史的意義について

飯 田 鼎

- 一、はしがき
- 二、チャーチスト運動の性格——中産階級の役割——
- 三、改良主義と革命主義——オーエン的世界觀とオ
ンナー主義との闘争——
- 四、勞働運動史より見たその意義

The Feud between the capitalist and
 labourer, the House of Have and the
 House of Want, is as old as social
 union, and can never be entirely
 quieted. —George Bancroft—

およそ、人間の歴史はときがたい謎にみちているといわれる。云
 うまでもなく、このときがたい謎を、ひとつひとつ、丹念にときあ

チャーチスト運動の特質とその歴史的意義について

かし、その多くの事實のなかに、法則性を追求することこそ歴史學
 の課題であり、なかならず社會史に志す者の任務でなければならな
 い。だが、過去の事實に對する正しい認識と把握とによつて、はじ
 めて、過去における人間の社會生活の眞の姿を理解することができ
 るとすれば、その過去の事實を記した記録や文書は有力な手がかり
 であり、指針である。とくに勞働運動の歴史においては、その時代
 に育ち、その運動の渦中にあり、そのなかで苦惱した人々の記録
 は、何よりも貴重な價值をもっている。歴史——勞働運動史をふく
 めて——を正しく理解するために、これらの貴重な資料を正しく判
 讀することは、もちろん絶對に必要なことではあるが、その歴史的
 な現象や、社會經濟的な事件が、現代のわれわれにとつてどのよう
 な意味をもっているか、といういわゆる歴史的な評價の問題になる
 と、この資料をどのように解釋するかということが、ひとつの大き
 な問題となる。歴史學は、その名の示すとおり、過去の事實に對す
 る正しい認識と具體的な把握から始められねばならないが、何のた
 めに過去の事實を究めようとするのかという、もつとも初歩的な、

しかももつとも重大な問題になると、歴史に對するその人の態度、云いかえれば方法論として歴史觀とが問題とならざるをえない。資料を蒐集し、それを正しく判讀することだけが歴史家の課題ではない。そうすることが、歴史の研究に志す者の責務であることは勿論であるが、それはほんの第一にすぎない。現實のさしせまつた要求にせまられ、社會的な關心にかられて、過去の事實の探求に沈潜するときそこにまた、歴史に對する新しい態度も發見され新しい認識も生れうるのである。

産業革命の歴史は、近代史の研究に志す者にとつて、依然としてひとつの大きな謎ではないだろうか。十九世紀後半以後、現代まで、これに關するおびただしい文献が刊行され、貴重な資料も發見され、部分的には、きわめて徹底的な研究もなされた。産業革命という題目は、近代史家にとつては、あたかも掘りつくされた鑛山の如く魅力のないものとなりつつあるかのような觀がある。しかし産業革命という鑛脈は、まつたく掘りつくされ、その秘密の全貌は完全に明らかになされたと斷言することはできずであらうか。わたくしは、今なお依然としてヴェールに包まれたものひとつに、チャーチスト運動を見出すのである。

註(1) 現代におけるもつともすぐれた經濟學者の一人であるモリス・ドブ (Maurice Dobb) がその「資本主義發展の研究」(Studies in the Development of Capitalism, 1946. 邦譯 岩波現代叢書)の序文に「そのように云つては、言葉は、示唆に富む。「それは經濟學上の分析というものは、歴史的發展の研究

えてみると、おそらくこれを説明するものは、それよりも、われわれの前に立ちあらわれるこの時期の客觀的状況のうちにあることがわかつてくる。すなわち、産業革命から生じた經濟組織の發展が、ひじょうに複雑であり、さらにその本質が見かけとは大へんなちがひだから、解釋そのものが、まつたく手におえぬ仕事になるのだ、ということがわかつてくる。」と(傍點筆者)。

二

普通にチャーチスト運動と云えば、一八三七年頃から、一八四八年頃に至る十年間、イギリスの朝野をさわがした労働者階級を主體とする大政治運動——普通選舉權獲得のための——であると考へられてゐる。すなわちレーニンも、「イギリスが、最初の廣範な眞に大衆的な政治的に形をなしたプロレタリア的革命運動——チャーチズムを世界にもたらした」と云つてゐるように、チャーチスト運動こそは世界で最初の、大規模な労働者による政治運動であることは事實であるが、しかしそれは單純な性格のものではなかつたやうである。その性格を決定する上に重大な要素である指導者の出身階級をみて、その初期にはそれらの人々は、必ずしもレーニンのいわゆるプロレタリア階級出身の人々ばかりではなく、プチ・ブル階級や熟練と技術を誇る舊親方層からも出ていたことは、たとえば、當時、ジョン・スチュアート・ミルなどと、すぐれた文明批判家社會評論家として活躍していたトーマス・カーライルが、つぎのやうに云つてゐることからも明らかである。「チャーチイズムの信奉者は、一般に労働者階級のなかでも比較的高給をうけ、頭の働く

チャーチスト運動の特質とその歴史的意義について

とむすびついたときにはじめて、意味をもち、またそのときはじめて實をむすぶのだという信念、および、現在の問題に關心をもつ經濟學者は、かれ自身の問題のあるものを、歴史的事實に照らしてみるべきだという信念である。」と(傍點筆者)。

(2) 同じこの書の第七章、産業革命と十九世紀の冒頭に、ドブが「産業革命の時代までくると、スケールの大きな、廣い展望をもつた問題が、われわれがやつてゐるこの種の研究の前に立ちふさがつてゐる。ひとは手近に、事實の記録という形で、かぎりなくゆたかな原資料に出くわすのであつて、その資料の多くは、(すべてではないが)すでにその道の専門家たちによつてよりわけられ分類されてゐる。じゆうぶんに手を加えられたキャンパスには、細かい描寫が一杯になつてゐるので、その畫面を要領よく印象派風に模寫してやるうと思つて、亂暴者がそれにかづくと、そのひとは、容易ならぬジレンマにぶつかつて、その野心をくじかれ……それにもかかわらず、百年も前の資料を解明しようとしてこれに立ちむかう現代の經濟學者の感ずる困難は、まず第一に、資料があり餘つて困るといつたやうなものではないのである……われわれの研究は、この期間の歴史を因果的に調べることなのであるが、そのばあい、そのたずねる問題の立て方にとくに骨が折れるのは、この世紀の諸事件が、ひじょうに身近なものであるからであり、したがつて、詳細な記録が豊富なために、かえつてまつたくちががつた立場から、それを眺めることができるためにほかならない、とはじめのうちには考へたくなくなる。しかし、いつそうよく考

分派に屬してゐた。特に一八三六年より一八四三年迄においてそのであるのを見る。同時代の信すべき筋よりみれば、これはもちろん、社會の最低階級の運動ではなく、産業に従事する最もすぐれた人々の運動であつた」と。またマルクスおよびエンゲルスが、このチャーチスト運動のなかに、社會革命の必然性を豫見し、プロレタリア階級による社會主義社會の建設を夢見たであろうことは、例の共產黨宣言のなかの有名な文句をもつてしても想像しうるところであらう。とりわけ労働者の革命的な動きに敏感であつたエンゲルスは、「チャーチイズムは、一八三五年のその誕生以來、主として労働者間の運動であつて、まだ嚴格には急進的小ブルジョア階級から分離されていなかつた。労働者の急進主義は、ブルジョア階級の急進主義と手に手をとつて進んだ。彼のチャーチターは、兩者の合言葉であつた。彼等は、彼等のいわゆる國民會議なるものを、毎年共同で催した。あたかもそれは、同一黨であるかの觀を呈した。小ブルジョア階級は、當時選舉法改正法案の結果に對する絶望のためと、更に一八三七—三九年の不景氣のためと、非常に好戰的氣分になつていたので、猛烈なチャーチスト運動を大いに歓迎した」と。すなわちチャーチスト運動は、たしかにプロレタリア階級を運動の主體としていたにせよ、プチ・ブル的な色彩が認められたことは云うまでもない。すなわち、チャーチスト運動の性格が、單にプロレタリア的革命運動というだけでなく、またブルジョア民主主義者の運動の一面をもつていたことは、從來しばしば、閑却されてゐるところである。そこでわたくしは、まずチャーチスト運動の前史とも云うべき一八三二年以後の労働運動を概観し、ロンドン労働者協會

を中心とするチャーチスト運動への動きのなかにその本質を把握したいと思う。

すでに前稿において指摘したように(本誌六月號拙稿を参照)、一八三二年以後の英國の労働者階級にとつて、もつとも重大な問題は、救貧法の改正であり、更にまた工場法制定運動であつた。新救貧法が當時の労働者階級に及ぼした影響については、相當くわしくのべたので、ここでは省略するが、とにかく一八三二年の選挙法改正の結果とドーチェスター事件とは、労働運動の指導者たちを政治運動に走らせ、新救貧法は、これに一層の拍車を加えたものであつた。しかしながら、一八三四年にはじまるドーチェスター事件はまた労働者の政治運動の發展をはばみ、一八三四年以後は、労働者階級の急進主義運動のための有効な指導部も中心も存在しなかつた。大衆運動としてのオーエン主義も衰え、古い指導者であつたコベックトやハントも死んだために、労働者の運動は統一と指導とを缺いていた。ところが、やがて新しい動きが見られた。かねてから労働者階級全國同盟(National Union of Working Classes)によつて新聞紙に對する印紙税の廢止を叫んでいた幾人かの人々は、一八三六年には、一部その目的を達して、印紙税は、四ペンスから一ペニーにひき下げられた。印紙税がひき下げられたことは、労働者の啓蒙と宣傳になくはならぬ急進的な新聞の發行を容易にした。そしてこの急進的な新聞——たとえばその最も代表的なものとして、ノーザン・スター(Northern Star)——こそ、チャーチスト運動のために大きな役割を果したのであつて、この運動に参加した人々のなかには、フランシス・ブレース、ウィリアム・ラヴェット、ヘン

リー・ヘザリントン、ジョン・クリュー、ジェームス・ワトソンなどがいた。これらの人々は、後にチャーチスト運動の主要な指導者として登場するのだが、ブレースはさておき、ラヴェットは、トマス・ホジキンとロバート・オーエンの影響をうけた。彼がいかに熱烈なオーエン主義者であつたかは、たとえば一八三二年に建設された有名な労働交換所(Labor Exchange Bazar)が失敗するまで、オーエンの協同組合主義の宣傳に専心したことからも明らかである。彼は後に、チャーチスト運動の一方の統領として、いわゆる「道徳派」を指揮するのであるが、彼はオコンナーのような輝かしい雄辯家ではなかつた。半ばはオーエン主義者であり、半ばはホジキン主義者であつた彼は、指導者というよりは有能な案内人であつたようである。チャーチストとしてのラヴェットの生涯については、彼の自傳「生活と闘争」(The Life and Struggles of William Lovett, 1876)に、くわしく物語られているが、彼はじみない闘争の人であるとともに、反面熱烈な理想主義者であり思慮深かつた。彼は、オーエンのもとに協同組合運動に専心することによつて選挙法改正の結果選挙権をあたえられずに失望していた労働者階級の支持をえた。ラヴェットは、オーエン主義者として、フランシス・ブレースの功利主義には反対であつたけれども、ヘンリー・ハントなどの、いわゆるロタンダ主義者のように、中産階級の代辯的な指導者たちを、裏切り者としてけなさず、労働者が普通選挙権を獲得するための、闘争の幅をひろくするためにその参加を認めたのである。かくして一八三六年六月、ブレースとラヴェットを中心に、ロンドン労働者協會(London Working Men's Assoc-

ation)が生れた。

「現在の状態では、いろいろと異つた階級の利害の分裂は、ある偉大な目的の達成に必要かくべからざるものである感情の合致を、非常にしばしば破壊するものであることが、経験から確信できる」と、ラヴェットがのべていることからわかるように、ロンドン労働者協會は、最初から複雑な問題をひそませていた。當時の七人の急進主義者が、名譽會員となつたが、フランシス・ブレース、ジェームス・オブライエン、ジョン・ブラック、フィアガス・オコンナー、ロバート・オーエン、W・J・フォックス、ウェイド博士で、この顔振れを見ても、ブレースとブラックは自由主義者、オーエンは社会主義者、オコンナーやオブライエンはともに労働運動の闘士であつて、思想と信念において、相異つた人々の集りであつたと同時に、その當時の知識階級をもつてかためられていたことは注目されねばならない。そして、労働者階級出身で、會員にならうとすれば、非常な困難を伴つたもので、この團體が、「労働者協會」という名前をかかげながらも、その性格は依然として中産階級であつたことは、疑いをいれない。一八三六年から三九年までの間に、この團體の名譽會員は三五名、普通會員は二七九名であつたといわれるが、その會員の多くはロンドンを中心として、根強く勢力をはつていた熟練工が、小親方であつたと考えられるのであつて、少くとも北部のランカシャ地方の繊維工のように、機械制大工場によつて、その職を奪われた純粹のプロレタリア層ではなかつたようである。この事實こそ、チャーチスト運動の中心が、何故に、後になつて、ロンドンからバーミンガム、そして更にランカシャやヨークン

ヤそしてサウス・ウェールズなどの、北部工業地帯へ移らざるをえなかつたか、その大きな理由のひとつなのである。従つて、この團體がオーエン主義を信するラヴェットと、マルサス主義の主張者でありベンサム主義者であつたブレースによつて支配されたことは少しも不思議ではなかつた。だがこうしているうちに、ロンドン労働者協會は發展をつづけた。すなわち、ケンブリッジシャ農民協會(Cambridgeshire Farmers' Association)の指導者G・B・バーナードは、アットウッドと同じ紙幣改革論者であつたが、このロンドン労働者協會に對して、一般的な政治運動のための兩團體の協力を求めた。しかしロンドン労働者協會はこれを拒否して、一八三七年頃までには、完全にその勢力を吸収してしまふほど強大となつた。この頃、やがてオコンナーとともに、チャーチスト運動の最左翼として活躍するジョージ・ジュリアン・ハーネー(George Julian Harney)も、やつとのことでロンドン労働者協會に入會を許されたのだつた。こうして協會は發展をつづけ、全國に同じような團體を結成していつた。クリューやヘザリントンはそれぞれブライトンやヨークンや遊説に出かけ、ウィンセントはハルをたずね、労働者階級の結束をうながすのに成功した。だが忘れてはならないことは、このチャーチスト運動の初期においては、運動の主體となつた人々は大體において、少数の中産階級出身のインテリゲンチヤであり、この周圍に集つた、比較的政治意識のたかい一部の目覺めた労働者の運動であつたことである。その何よりの證據は、例えば、一八三七年、協會は、「來るべき選挙に關して改革者たちへの呼びかけ」(Address

to Reformers on the Forthcoming Elections) とか、或は同年十二月、「英國およびアイルランドの改革者たちへの呼びかけ」(Address to the Reformers of Great Britain and Ireland) などの印刷物を發行しているが、これを見てもわかるように「労働者」とせず、「改革者」と呼んだことは興味深いものがある。

さて、一八三八年二月、いよいよロンドン労働者協會主催のもとに、有名なクラウン・アンド・アンカー通りにおいて、大會が開かれ、フィアガス・オコンナーやジョン・ベルも出席して、つぎのような下院に對する請願書を採擇した。この請願書こそ、人民憲章の基礎となつたものであつて、その序文の一節には、つぎのような文句が見られる。

「法律に従ふといふことは、つぎのような確實性の上に、正に強制されることにすぎないのだ。すなわち、法律に従ふことを要求される人々は、個人的にか或は彼等の代表者によつてか、法律を制定する力、それらを修正し、廢止する權力といふものを、もつてである。政治的な權力にあずかることから除外されているすべての人々は、まさに法律の效力のなかにはふくまれないのだ。すなわち、彼等にとつては、法律とは、專制的な法令にすぎない……」と。

このようにして、チャーチストたちの「六つの要點」が生れる。

(一) 成年男子の普通選挙權、(二) 平等なる選挙區、(三) 議員の毎年改選、(四) 議員資格の財産制限の排除、(五) 無記名投票、(六) 議員に俸給をあたえること。これは、一八三八年二月の大會の原案を、ブレイスとラヴェットが整理作成したものであつたが、興味深いことは、原案に

等は今や、普通選挙權獲得の意味をようやく理解しはじめたのであつて、ステイヴンやオコンナーをしてオーストララーの指導者と、ノーザン・スターやノーザン・リベレーターなどの新聞紙も、ともに労働者の士氣をふるい立たせるに役立つのである。そして、この頃から、ロンドン労働者協會内部にも複雑な問題を生ずるとともに、チャーチスト運動の意義が、一般の労働者大衆に理解されはじめ、今までは、ともすればわき役であつた革新的なオコンナー一派の勢力が、いちじるしく増大していつた。これはチャーチスト運動そのものが、労働者階級のための運動である以上當然であつたが、革新的勢力の増大という事實こそ、實は新救貧法に對する北部の労働者の勇敢な闘い、たえずおしきげられてゆく生活條件のなかからの、悲痛な叫びの反映にほかならなかつた。

しかしいづれにせよ、精銳なオコンナーによつて代表される、革命的な勢力が増大することは、はじめに、このチャーチスト運動の指揮者であり、世話役であつた中産階級的な指導者たちにとつて、面白からうはずはなかつた。何故なら、それは、はじめに彼等が意圖した方向とは、全く別の方向へ進むかのように見えたからである。彼等は驚き慨嘆し、そして失望した。ブルジョア民主主義者、フランス・ブレイスは、正にそのような一人であつた。

一八三八年五月および八月には、グラスゴーおよびバーミンガムにおいて、大デモ行進が行われて、チャーチターの叫びはイングリッシュ全土をおおひ、北部の労働者の大部分はこのスロトガンのもとに團結した觀があつた。一八三八年九月十七日、ロンドン労働者協會は、ロンドンで運動を開始すべく、パラス・ヤードで、野外大會を

チャーチスト運動の特質とその歴史的意義について

は、婦人参政權にかんする條項があつたのに、後に拋棄されてしまつたことである。クラウン・アンド・アンカーでの集會は、急進的な議員たちの心を動かしたが、そのなかには、サー・ウィリヤム・モールスワース(Sir William Molesworth)、ダニエル・オコネル(Daniel O'Connell)、ヒンドレー、シャーマン・クロフ・オード(Sharnan Crawford)、ジョセフ・ヒューム(Joseph Hume)、J. A. ロバック(J. A. Roebuck)などがいた。そこでロンドン労働者協會の指導者たちは、普通選挙法を下院で通過させようとして運動したが、その法案があまりにもはつきりした形で提出されたため、議員たちは、下院に提出することをためらつていゝた。つまりこれらの議員たちにして見れば、ほとんど通過する見込みのないチャーチターをもち出したところで、無駄であるといふ見解が支配的であつた。云いかえるならば、ロンドン労働者協會の指導者たちと議員との關係は、必ずしも密接なものではなかつた。議員である急進主義者たちは、この草案の通過を不可能とみて、熱意をもたなかつた。また一方、協會に加入していた労働者たちは、この團體の指導權が中産階級出身の人々の手にあるのを考へて、彼らを猜疑し、再び一八三二年のあの裏切りを繰り返すのではないかと恐れだ。そしてこのような雰囲気うちに、チャーチターは公けにされたのである。

さて、この當時から、ロンドン労働者協會は次第に急進的な方向に動きはじめた。景氣は悪化しはじめ、ヘザリントンやクリヴ、そしてヴィンセントなどの、新救貧法に對する闘争は日毎にはげしさを加え、それとともに労働者たちの意識も昂められていつた。彼開いた。想えばそれは、この協會の最後の集會となつたのだつた。ブレイスとロバックは、代表委員に加わるように要求されたが、ブレイスは、極力これを辭退して、ロバックを推した。ブレイスは、チャーチスト運動が、たとへば一八三二年の選挙法改正のときのように、ある事件が、政治を革命的な状態にもたらしつたのでなければ、ほとんど成功の機會はないだろうと考へていつた。しかし、ブルジョア急進主義者であつた彼が、労働者階級による革命的な事件の勃發を、心から期待していつたとは考へられない。ただ彼はそのような革命的な事件によつて、教養ある労働者出身の指導者に指導される民主的な政黨が生れることを願つていつた。たとえばブレイスが欲した運動の種類といふものは、反穀物法運動のようなものによつて説明される。そこで彼は、ロンドン労働者協會の人々をして、新救貧法に反對したり、社會主義的な演説をしないように約束させたのだ。だが彼の努力は時代の流れに逆行する無益のものにすぎなかつた。一八三九年二月四日の大會では、オコンナーとその黨派は、はじめからこれを牛耳り、アットウッドの通貨改革案は排除され、ラヴェットは大會の書記にさせられたが、労働者出身の代表者は、ラヴェットを疑つていつたようである。チャーチイズムの中央機關紙はきわめて露骨な文句をもつてつぎのように宣言した。「社會主義とチャーチイズムとは同一の目的を追求するものであつて、ただその方法を異にするのみ」と。しかしこの主張に同調すべきはずのオコンナーは、急進的な社會主義者オコンナーが、敵意をいだいたことをみて、チャーチスト運動が、いかに急進的な方向に進んでいつたかを、うかがい知ることができよう。このようにして、ついに

ロンドン労働者協會は、チャーティズムのなかに吸収されてしまつたのである。

チャーティスト運動はもはや、プレースたちの手にはおえないものとなつた。そしてラヴェットは、かつては裏切り者の一味として憎んだが、今は尊敬する先輩、「冷静な頭脳と温い心の持主の老紳士」フランシス・プレースにあてて、つぎのような手紙をおくつてゐることは、チャーティスト運動をめぐるラヴェット派とオコンナー派との対立を暗示して、まことに興味深いものがある。

「われわれは、われわれがかつて理解したよりもよく、お互に理解しはじめています。北部でわれわれに對してなされたわれわれのない中傷は、消散しつつあります。そして血と雷の英雄たち(オコンナー派を諷刺した表現……筆者)は疲れきつています」と。運動の主導権がオコンナー一派の手にうつるにつれて、プレースには、チャーティスト運動の性格というものが、段々わかつてきた。そして自分が最初に意圖したものは、およそ似ても似つかぬものとなつてゐるのに驚嘆したことであろう。イングランド北部へ行つたことがなかつたプレースは、ランカシャ、ヨークシャおよびサウス・ウェールズなどの状態については、あまり知らなかつた。そこではもはや、武力的な弾壓以外には、労働者の運動をおさえることができないほど昂まつていた。このような北部の鬪争的な状態は、南部の労働者に影響をあたえ、チャーティスト會議がバーミンガムへ移つたときには、ラヴェットや他の「道徳派」の人々でさえも、腕力的な手段に訴えんとする方向にむかつたほどであつた。北部での蜂起は、ネーピア卿の軍隊に弾壓されてしまつたが、小

規模な蜂起は、ニューポートやバーミンガムなどでおこり、一八三九年から四〇年の間に、ほとんど全部の指導者は捕えられた。プレースは、これらの人々が死刑にならないように運動するとともに、ラヴェットやその他の人たちが處刑された誹毀罪に抗議したのであつた。しかしプレースはこれらの人々のために、當局に抗議する勇氣はもつていたとしても、決して同情はしなかつた。彼は今やオコンナー派の人々は無論のこと、今迄親しかつたラヴェットやその同志たちに失望し、労働者階級全體に強い失望を感じていた。かつて一八二〇年代、あのきびしい團結禁止法の撤廢に日夜奔走してゐた當時のプレースは、労働者階級のよき相談相手であり頼りになる味方であつた。労働者の組織が弱く、保守反動勢力が根強かつたその當時において、プレースの果たした役割は少くとも進歩的でありえた。だが時代はかわつた。今や労働者は、ひとつの巨大な組織をもつ階級として、しつかり起ち、みずからの頭をもつて考え、みずからその手足をもつて行動する恐ろしい存在となつた。一八四一年、三月一日、クラウン・アンド・アンカーの酒場で開かれた反穀物法連盟の會合に出席したときの印象について、プレースは、ラヴェット派の一人で投獄されてゐたジョン・ユリンズにあてて、つぎのような面白い手紙を書いた。⁽¹⁶⁾

「わたしも今迄に、多くのやかましい會合に出席したが、しかし昨夜わたしは、今迄見たのとは、到底比較にならないほどの會合を見たのだ。わたしは、まったく、しゃくにさわつた。そしてわたしの前にいるその人々を、非常にはずかしく思つた。そこでわたしは、座つて、フランス革命初期の、あのおそろべき害悪とい

三三四頁。
(4) Mark Hovell; The Chartist Movement, 1950, p. 52.
(5) G. D. H. Cole; A short history of the British Working Class Movement, 1952, p. 96. 邦譯「第一卷」一六七頁。

うものを考えてみた……わたしはつぎのように確信する。もし聴衆の大部分をしめてゐる人々が……警官や兵隊によつておどされれないとしたら、フランス革命の最悪の状態のすべての恐怖、あらゆる種類のとんでもない残酷さと、巨大な害悪が、これらの人々によつてなされるであろう」と(傍點筆者)。

プレースの役目はすでに終つていた。かつては進歩的であつたこのブルジョア急進主義者は、今や反動的な側面を明らかにした。⁽¹⁷⁾云いかえるならば、チャーティスト運動は、それほど急速なテンポをもつて進展しつゝあつたのである。以上において、一八四〇年頃までのチャーティスト運動の動きについて、主としてそのなかに登場する人物を背景として、のべてきた。もちろんこの人々の役割は、その時代的な要求の然らしめたところではあつたが、とにかく讀者は、これによつて、チャーティスト運動の推移とその性格のうつりかわりについて、概略を知りえたであらう。もとより複雑な真相について、正確に探知することはむずかしににしても、とにかく、それは、「労働者階級による革命的な政治運動」というたつた一口の言葉で表現するには、あまりにも複雑多岐であるという事實である。

わたくしはつぎに、チャーティスト運動の第二段階について語るべき時機に到達した。

註(1) シマイホフ、野間清譯「國際労働運動史」三一頁。
(2) Thomas Carlyle; Chartist, 1839, chapter 4.
(3) F. エンゲルス、竹内譯「英國労働階級の狀態」三三三—

チャーティスト運動の特質とその歴史的意義について

(4) G. D. H. Cole; Chartist Portraits, 1941, pp. 40-41.
(5) William Lovett; Life and Struggles, 1876, pp. 91-92.
(6) Mark Hovell; *ibid.*, p. 56.
(7) R. G. Gammage; History of the Chartist Movement, 1894, p. 10.
(8) G. D. H. Cole; Chartist Portraits, 1941, pp. 40-41.
(9) William Lovett; Life and Struggles, 1876, pp. 91-92.
(10) Hovell; *ibid.*, p. 62.
(11) Hovell; *ibid.*, p. 69.
(12) Hovell; *ibid.*, p. 74.
(13) Graham Wallace; Life of Francis Place, p. 369.
(14) マックス・ヌブ、國乾治譯「英國社會主義史」第二卷五〇頁。
(15) Wallace; *ibid.*, p. 374.
(16) Lovett; *ibid.*, p. 164.
(17) Wallace; *ibid.*, p. 374.
(18) Wallace; *ibid.*, p. 377.
(19) プレースの文章は讀みにくいことでは有名である。そのためか、例えば彼の自敘傳も原稿のまま存在するが刊行されず Margaret Cole; Makers of the Labour Movement, 1948, p. 40. また一八四〇年から四三年までの數年間で、チ

チャーチスト運動の歴史について書いているが、出版されずに終つたのは實に残念である。貴重な資料として役立つと思われるが……。

三

さききのべたように、チャーチスト運動は、一八四〇年代に入るにつれて、ロンドンから北部ランカシャー地方へ移る傾向を示した。云うまでもなく、チャーチスト運動そのものは、中産階級もしくは小親方出身の指導者によつて、主として指導されてきたが、やがてそれは北部の工業労働者の強く支持するところとなつた。すなわち、最初は穀物法反対運動のような、北部および中部のいわば雇用者たちの運動、従つてリチャード・コブデンやジョン・ブライイトなどの中産階級の運動が、チャーチスト運動の一翼として豊富な資金をもつて労働者に訴えていたために、運動は、ともすれば労働者階級の運動としての純粹性を缺いた。ところが、一八三九年に、ニュー・ポートの反亂がおこつて、これら穀物法反対の指導者たちは、チャーチストに對する同情を失ひ、これから分離する傾向を示すやいなや、チャーチスト運動は、次第にその姿を鮮明にし、とくに、フィアガス・オコンナーの指導のもとに、ひたすら急進的な方向へみちびかれていつた。何故に改良主義としてのラヴェット派は、オコンナー派にとつて代られたのであろうか。一八三九年、チャーチスト運動は、その指導者のほとんど全部が、誹毀罪によつて投獄されたため、一時瓦解してしまつた。その當時はまだ、オコンナーの勢力は、それほど大きくはなかつたが、全國憲章連盟

(National Charter Association) が結成された當時より、オコンナーの名聲は多くの指導者の上に、にわかに重きをなすようになった。その理由については、ある學者は、「その原因の主たるものは、彼のあくことなき名譽慾權勢にあることは諸著の一致するところであるけれども、そもそも彼が低級なる煽動法によつて、その目的を達した根本原因はやはり、彼の人物が當時低級なる労働者の人氣に投じたと判断せねばならぬ。オコンナーはアイルランドの名家に生れて大學教育を受けたけれども、その學識においては獨學自成のラヴェットに及ばず、社會改造の熱意はあつたに相違ないが、とかく自分の野心が先に立つような人物であつたらしい」と酷評しているが、これは必ずしも當つていない。オコンナーが民衆の指導者として、チャーチストの信任をあつめることができたのは、何よりもそのすぐれた組織者としての才能、すばらしい雄辯と強靱な性格のためであつたというよりは、オコンナーが労働運動の渦中にあつて、その流れに巧妙にのつたからにはかならない。一八三七年から一八四七年まで、まつたくぎりぎりのところまで来てしまつたときだけ、飢えている人に救いの手をさしのべたものであつて、労働者階級の廣はん大衆は、このようにして、ぬけ道のない絶望的な監獄にとじこめられたのも同然であつた。オコンナーの心は飢えに苦しむアイルランドの農民、英國の植民地政策のもとに、長い間呻吟してきたアイルランド民衆を代表するとともに、他方、低賃金と新救貧法に苦しむ工業労働者の上にむけられたのである。チャーチスト運動の後期の段階において、オコンナー派が勝利を得たのは、決して偶然ではなかつた。

オコンナーその人の一生は、まことに波瀾にみちた数奇な生涯であつたが、彼についてのままとまつた傳記は書かれていないために、くわしく知ることはできない。彼はアイルランドのコーク州に生れたが、彼の父ロジャーも叔父アーサーも、アイルランド獨立の闘士であつたというから、労働運動の指導者としての彼の素質は、天性のものであつたのであろう。ダブリンのトリニティ大學に入學して辯護士の免許状をとつた若き日の彼の胸のなかには、舊教徒解放の英雄ダニエル・オコンネル (Daniel O'Connell) がイメージとして描かれていた。だが、彼がはじめて實際に政治の舞臺に姿をあらわしたのは、一八三二年頃からであつた。彼は天才的な煽動家であつたので、わずか数年の間にチャーチスト運動を指導することになつたのだ。彼にあひせかけられたあらゆる罵倒——下劣な品性、野心家、ほら吹きなど——にもかかわらず、彼は、被壓迫民族の知識人として、搾取と壓制に悩むアイルランドの民衆を忘れたことはなかつた。祖國アイルランドの民衆を英國の壓迫から解放し、獨立をかちとるための運動を組織することは、彼の念願であつたろう。いや、壓制を被つてゐる民族の出身であつたことが、やがて彼を搾取されている階級、労働者階級の解放運動へ驅りたてる大きな動機となつたかもしれない。「アイルランドは——經濟上には最も退歩したる、しかも政治的には最も障害をうけた英王國の邊境の地であるが——世界最大の産業國たる英國が、社會主義および革命の大衆運動の辯者と指揮者とをうけたのは、實にこのアイルランドからであつた……オコンナーの叛逆の目的は、ヨークシャーの人々のそれとは何等關係がなかつた。ヨークシャー人の希望は社會革命であつた

チャーチスト運動の特質とその歴史的意義について

が、オコンナーが日夜考へ夢みたことは、アイルランドの獨立であつた。」
ニュー・ポートの蜂起は政府をおどろかし、チャーチスト運動を彈壓するためのよい口實をあたえたものであつた。投獄や流刑がつづいた。そのなかにはオコンナーやオブライエンもいたが、彼等は一年半から二年の牢獄生活を強いられたのであつて、このような苦難の生活は、やがてラヴェットやヴィンセントの心に動搖をもたらしたのだつた。だがこのような壊滅状態にもチャーチストたちはめげなかつた。荒廢したなかに、ハーニーやローリー (Robert Lowery) をふくめて、一八四〇年の下半年、運動は再びもり上つた。今度は彼等は組織的に運動を展開した。すべての地方組織を、全國チャーチスト協會 (National Chartist Association) に加入させて、ばらばらの地方的な運動ではなく、全國的な組織をつくつたのだ。これは、非合法の組織であつたので、ラヴェットらの合法主義者は加入しなかつた。この組織がいかに大衆の要求に應じたものであつたかは、執行委員や定期大會そして更に會員名簿をもち、あたかも一大政黨の觀を呈した。四〇〇の地方支部をもち、四萬人の會員を有した。しかしながら、この當時からチャーチストの指導者層の間には、思想的な分裂が目立つてきた。チャーチストに對する彈壓がげしくなり、運動が次第に困難になつてきたとき、ラヴェットやヘザリントンをしてヴィンセントなどのロンドンの指導者たちは、オコンナーを中心とするヨークシャー地方の運動が、きわめて危険なものであると考へた。ラヴェットやヘザリントンは、もともととオーエン主義者であつたので、労働者の間に教育を普及し、彼等

が道徳的にたかめられてこそ、はじめて選挙権を獲得できるのであるという理想主義・人格主義的な政治論をいだいていた。それゆえラヴェット等の「道徳派」といわれた一群の指導者たちが、オコンナーの革命的な運動方針に反対であったことは云うまでもない。ラヴェット等の主張が、何故にこのように改良的であつて革命的でなかつたかについては、さきにも述べたように、ロンドンで最初にはじめられたチャーチスト運動は、中産階級の影響が根強く、少くとも窮乏のどん底にあえぐプロレタリアートの運動ではなく、「一般に労働者階級のうちでも比較的高給をうけ、頭の働く人々の運動であつた」からである。チャーチスト運動が、何故に最初にロンドンにおこつたかを考えれば、この間の事情はおのずから明らかである。ラヴェットやヘザリントンそしてワトソンなどの指導者たちは、このような階層の支持をえていたのである。

ところがオコンナーの場合は、ラヴェット等とは全然反対であつた。アイルランド出身の年若い革命家オコンナーが、北部ヨークンヤ地方で發見した労働者たちは、ラヴェットやヘザリントンがロンドンで指導したような高級熟練工ではなかつた。院外救助をうちきられて苦しむ貧民、失業と低賃金と過重な労働に悩む労働者、チャーターなどの政治的な権利よりは、今日のパンの方が重大な問題である。廣はんなプロレタリア大衆であつた。オコンナーが、チャーチスト運動とは、要するに「ナイフとフォークの問題」であると考へたのは當然である。なるほど、ロンドンの思慮ある労働者にしてみれば、オコンナーは權勢をはる煽動政治家であり、多くの古くさい言葉をつかう田舎者であつたが、オコンナーにしてみれば、ロンドンの

れに参加した労働者の数から云つても、おそらく世界にその例をみない大運動であつたことは事實である。ただわたくしの云わんとするところは、それが、言葉の眞の意味における「プロレタリア階級の、プロレタリア階級による、プロレタリア階級のための」革命的な運動であつたかどうか、ということなのである。このことをはつきりと把握するために、つぎに結論として、労働運動の歴史よりみたその意義について考へたいと思う。

- (1) 上田貞次郎氏「産業革命史」改造社、一七九頁。
- (2) G. D. H. Cole; Chartist Portraits, p. 364.
- (3) M. ハフ、國乾治譯「英國社會主義史」第二卷十一頁。
- (4) Th. Rothstein; From Chartistism to Labourism, 1929, p. 68.
- (5) M. ベア、前掲書、十四頁。
- (6) モーリス・ドップ、「資本主義發展の研究(II)」、岩波現代叢書。

四

まず、チャーターの「六つの要點」についてであるが、もつとも注目すべきことは、これらの要求が、純粹に政治的なものに限定されてゐること、従つてそれは、一八三二年の選挙法改正のいわば續きであることである。チャーチスト運動そのものは、きわめて活潑に、そしてとくに後期においては革命的な動きも見られたが、しかしそれは現存社會をくつがえして、労働者階級のための國家を建設

チャーチスト運動の特質とその歴史的意義について

労働者の如きは、彼が望みをかけた大衆ではなかつた。オコンナーは、綾織木綿の短上衣をき、ひげもそらず、ふくれ上つた手を有する人々にこそ望みをかけ、この人々に訴へたのである。まことに、モーリス・ドップが適切に表現しているように、「チャーチスト運動の内部における見解の差異は、木底の靴をはき、あごひげをあたらず、コールテンのジャケットを著した北部都市の工場労働者——イアガス・オコンナーが共鳴を求めたのはこのひとたちであつた——と、ラヴェットに従つたロンドンの熟練工と黒煙地帯の小親方職人との對照を、明瞭に反映してゐた」のである。

その後、チャーチスト運動は次第に分裂をうけ、とくに一八四一年以後選挙對策をめぐる、ラヴェット派とオコンナー派、そして特にプロテール・オブライエンとオコンナーが見解を異にしたために、その統一と團結の力は急速に弱められ、やがてチャーチスト運動が没落する契機をつくり出した。すなわちそれから一八四二年の深刻な不景氣を峠として、チャーチスト運動が絶頂に達して以來、一八四八年頃までに衰へてしまふのであるが、この過程についてくわしくのべることは、わたくしの目的ではない。わたくしが目的としたところは、チャーチスト運動をもつて、ともすれば「プロレタリア階級の革命的な政治運動」というふうな、簡単に割りきつた考へ方に對し、ひとつの疑問を提出し、それがいかに複雑なものであるか、しかもその複雑性は、運動そのものの経過をふくめて、この運動を生み出した産業革命そのものに由來するということを、明らかにすることであつた。云うまでもなく、チャーチスト運動は、労働者による政治運動としては、たとえば、その規模においても、そ

しようとするようなものではなかつた。すなわち、チャーチスト運動はその始めから終りまで、「請願書」という形をとつて行われたことは、この運動を大きく特徴づけるものではなかつたであろうか。ラヴェットやヘザリントンなどのように、オーエンの訓えをうけた人々が社會主義という言葉を用いたことは事實であるし、オコンナーもまた、「自分は土地社會主義者である」と宣言し、この運動の指導者となつた多くの人々が、社會主義的な思想をいだいていたのであることは容易に想像できるけれども、それによつて、労働者のための政黨、社會主義政黨を建設しようとする積極的な意圖があつたとは考へられない。マルクス主義者として、英國社會主義の歴史に深い理解を示しているマックス・ベアは、「それは他の階級および國民を掠奪し奴隷にして、貴族社會と同等の權利をえようとする庶民の闘争ではなく、資本主義社會を顛覆し、生産、分配および交換を、協同主義の基礎の上におくことを目的とする階級闘争であつた」と云つてゐるが、成程それは、はげしい階級闘争によつて終始つらぬかれていたにせよ、その目的が社會主義社會の實現ということにかかれていたかどうかは疑問である。すなわち、問題は、チャーチスト運動が、社會主義的な傾向をより強くもつていた政治運動であつたか、それとも社會主義的な要求をふくみながらも、それは主としていわゆる民主主義的な運動にすぎなかつたか、ということである。わたくしは、チャーチストたちの綱領からみて、この運動が社會主義的な側面をもちながらも、反面、たとえば自由民權運動のよる傾向をより多くもつ政治的な改革運動であると考へるものである。

その何よりの證據は、チャーチスト運動が當時の労働組合と密接な關係を結ばなかつたことであり、むしろその支持をえることができなかったことである。それは何故であつたか。云うまでもなく、自由民権運動は開明的なブルジョアジーが先頭に起つたのに反し、チャーチスト運動は、労働者階級を中心としていた點は、大いに違つてゐるにもかかわらず、いずれも、專制政治に反抗して、政治的な諸權利をかちとろうとしたところに、大きな類似性をもつてゐる。それにしても労働運動の歴史に、それほど多くの貢獻をしたチャーチスト運動は、何故に、労働組合の支持をえることができなかったか。この場合労働者が最も多くの運動に参加したことは、必ずしもそれが組合という組織の上につきかりと根をはつていたということを意味しなかつた。チャーチスト運動は、一八四二年の秋、經濟的不況にもなる賃金のきり下げに對するセネ・ストの失敗以後、急速に崩壊のきざしをみせるのであるが、その大きな原因のひとつは、労働組合の強い支持をえなかつたことであつた。ソドニー・ウェップが「つきのように言つてゐるのは、この事情を物語つてゐる。「しかしわれわれは、一八三九年から四二年までの労働組合團體が、チャーチストの基金に獻金するどころか、チャーチストの犠牲者たちのために、金を集めることさえしなかつたのを知つてゐる。ジョン・フロストやウィリヤムズをしてジョーンズや一八三九年のニュー・ポートの叛逆者たちは、少くともグラスゴウの綿紡績工の事件と同じく、労働者階級の同情に値するものであつた」。だが労働組合は、この人々を助けるために金を集めたり、嘆願書を用意したりするやうな傾向はなかつた。フィアガス・オコンナーは、一八

四六年につきのよう書いてゐる。「今迄に、これらの人々の苦惱に對して、英國の組合があきらかにした冷淡さほど、罪な冷淡さというものはなかつた」と。そしてオコンナーは、つぎのようにつけ加える。「もしも、ドーチエスターの労働者たちやグラスゴウの綿紡績工たちのためになされた半分だけでも、フロストやウィリヤムズをしてジョーンズのためになされたならば、彼等はつと以前に元氣を恢復していただであらう」と。これこそチャーチスト運動のもつとも弱い點であり、悲劇と失敗の最大原因であつた。そしてまた、ここにチャーチスト運動の複雑多岐な所以がある。云いかえらば、チャーチスト運動は労働組合運動と交錯しつつも、一體とはならなかつたのである。

しかしいづれにせよ、チャーチスト運動の失敗の經驗は、労働者階級の前進のために役立つことは事實である。その失敗は、ひとり英國だけでなく、世界の労働運動にとつて必ず回顧されるべき記念碑ともなつた。すなわちそれは、資本家階級に對し労働者階級の團結の力を示した最も大規模な、もつとも革命的な政治運動であつた。それゆゑ、チャーチスト運動をもつて、労働黨成立のための、最も大きな歴史的根據であると考へることはできないであらうか。

以上わたくしは、三回にわたり、十九世紀初頭から三十年間のイギリス労働運動を、労働黨成立の歴史的根據という視點から概観した。ナポレオン戦争直後からチャーチスト運動敗北の年一八四八年までの三十年間は、イギリス労働運動の歴史にとつて、もつとも重要な一時期であつた。この時期に労働運動は偉大な社會主義者、指

導者を生み、労働運動は世界に類を見ないほどの規模をもつて昂揚した。そして、そのなかにすでに、労働者のための政黨出現の條件はつくられていた。それから一八五〇年以後、イギリス資本主義は相對的安定期に入り、労働運動は、一八八〇年代の復活の時期まで、協同組合運動に吸収されていた。そこでわたくしは、チャーチスト運動をもつて、労働黨史研究の序説を終りたいと思ふ。

註(1) M・ヘブ、「英國社會主義史」第二卷二〇四頁。

(2) S. and B. Webb; History of Trade Unionism, 1920, p. 177.

《追記》この論文をつくるにあつて、慶應義塾の圖書館には所蔵されていない貴重な文献を、非常な好意をもつて、閲覽する機會をあたえて下さつた中央大學助教島崎晴哉氏、一橋大學専任講師大陽寺順一氏の御厚意に對し、感謝の言葉をのべさせていたたくものである。——一九五五・九・十四——